

戦国武将青木一重



写真1 大坂夏の陣屏風（部分）

豊臣・徳川の最後の決戦、大坂夏の陣。大坂城三の丸の豊臣秀頼本陣近くに近衛隊七手組の青木勢が描かれている。指揮しているのは、七手組組頭青木一重の代理として養子の青木駿河守正重。紺色の小田原笠に金の切裂のついた正重の馬印、紺地に白抜きの「富士山に御神火」紋の幟が見える。ひしめく軍勢の内には青木一重の伊予領の武士団一色党も加わっている様子である。

青木一重は豊臣秀吉の天下のもとでまとまった領知を与えられた。「青木伝記」という史料によれば、当初伊予国周布郡に1万石余の領知を与えられたとみられる。その後天正13年（1585）夏に、周布郡で三津屋・北条・周敷・石田村など4,274石余、備中国浅口・小田・後月郡で2,638石余、そして摂津国豊嶋郡で豊嶋庄3,100石の領知に変更された。この年摂津国で茨木城主中川氏の転封と秀吉家臣への領知宛行いが行われた一環であろう。

一重自身は大坂城下谷町（大阪府中央区）の屋敷に詰めていたので、豊嶋領は家臣の江原新右衛門が堂池の近くに屋敷を造って管理していた。この時代に箕面川から水を引き豊嶋郷を灌漑する江原井が開発された。また文禄4年（1595）から慶長13年（1608）にかけて、周辺の山所池・さら池・飯田池が造られており、陣屋周辺の環境が整えられている。また伊予領には一重の甥で養子となった駿河守正重がおもむいて支配したといわれ、文禄2年には三津屋村在住の武士一色重次が代官になっている。

一重は豊臣秀吉の天下統一の戦いに歴戦した。青木家伝来の系図によると、天正16年に秀吉の近衛隊とも言うべき七手組の頭の一人となったという。この年には正親町天皇が秀吉の別邸聚楽第に行幸したが、一重はそれに供奉し、従五位下民部少輔に任じられている。ただ七手組頭就任は徳川家康の推挙によるともいわれ、就任時期は豊臣秀頼の時代である可能性もある。文禄元年の朝鮮出兵に際し、秀吉は名護屋（佐賀県唐津市）に陣をしいたが、その時の「馬廻り」の内には後に青木組に所属した武士の名が多く見られるものの、一重の名前は確認できない。これは後者の説を裏づけている。

なお「青木伝記」によると、青木一重を頭とする組には大番士50人、与力10人、同心として弓・鉄砲隊100人が付属しており、右備の一翼を形成していたという。

豊臣政権の動揺 慶長3年に豊臣秀吉が没すると、豊臣政権は徳川家康ら五大老と石田三成ら五奉行が協力して政務をとることになったが、両者の間に軋轢を生じた。武人肌の青木一重は能吏であった三成と仲が悪く、旧主でもある家康に近づいた。

慶長5年の関ヶ原の合戦では徳川家康率いる東軍が勝利し、同8年には家康は征夷大將軍に任じられて江戸に幕府をひらいた。また豊臣家直轄地や西軍大名の領知没収などの戦後処理を行った。家康の信任あつ伊予国今治藩主藤堂高虎は、同11年夏に江戸城普請の功績の褒美として備中国で2万石の領知を加増された。その内には一重の備中領の村々が含まれている（「高山公実録」）。このことから関ヶ原戦後、一重の備中領も徳川方に没収ないし移封された可能性がある。

慶長18年正月10日付の「青木民部少輔組高付」という史料（写真7）には、一重領として豊嶋・備中・伊予領あわせて1万13石の領知が書き上げられている。ただ先にも述べたように関ヶ原の合戦後に藤堂領となった領知もこれに記されており、この段階の実態かどうかはわからない。

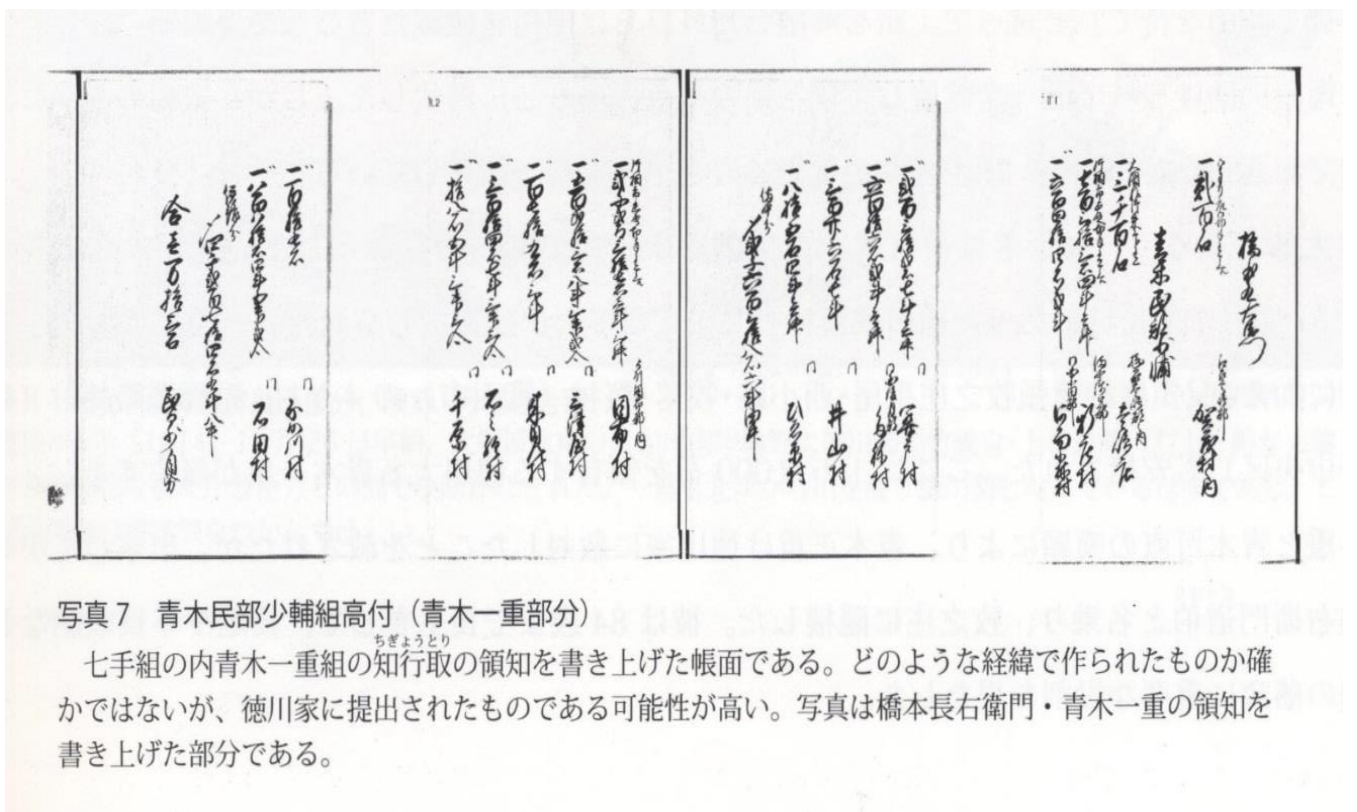


写真7 青木民部少輔組高付（青木一重部分）

七手組の内青木一重組の知行取の領知を書き上げた帳面である。どのような経緯で作られたものか確かではないが、徳川家に提出されたものである可能性が高い。写真は橋本長右衛門・青木一重の領知を書き上げた部分である。